



この人を たずねて

宇都宮大学教育学部 准教授

澤田匡人氏

インタビュー
大西まどか



Profile—さわだ まさと

2003年、筑波大学大学院心理学研究科博士課程修了。博士（心理学）。臨床心理士。専門は感情心理学、教育心理学。著書は『子どもの妬み感情とその対処』（単著、新曜社）、『自己意識的感情の心理学』（分担執筆、北大路書房）、『正しい恨みの晴らし方』（共著、ポプラ新書）など。
<http://schadenfreude.jp/>

「この人を訪ねて」というタイトルにもかかわらず、今回は澤田先生に東京女子大学までお越し頂きました。ということで、今回は「この人を迎えて」にタイトルを変えてお送りしたい所存です。

■澤田先生へのインタビュー

——一般書の執筆や、テレビの出演もされていますよね。

「妬み」に関するオファーだったのでお受けしました。学術書や論文は一般の人にはあまり読んでもらえないので、自分が調べたり、研究したりしてきたことを広く知ってもらえるというのは、メディアの良いところですね。「人に説明する」という意味では、メディア出演と授業のベクトルは同じだと思っています。噛み砕いて説明するというのは、言うほど簡単じゃないですよ。必ずしもやさしい言葉を使えば済むという話でもなく、その正解は未だに見えません。ですが、知識を「見やすくして」提供するためにはどうしたら良いかと試行錯誤を重ねながら、授業やプレゼンに臨んでいます。

——著書を拝読しました。研究をはじめたきっかけは、小学生にまで遡ると書かれていましたが……。

自分以外の人たちがすごく仲良さそうに見えると同時に、そうじゃない自分は劣っている気がして。当時は太っていたので尚更でした。でも中学に入ってダイエットしたら、今まで気後れしていたのが嘘のように友だちと関われるようになったんですよ。おそらく勝手に敷居を高く設定していた部分もあったんでしょうね。そして大学に進んでから、「あのときの苦しみ、皆のようになりたいもなれずにいた痛みの正体とは何か」と疑問に思うようになり、卒論のテーマに選んだのが妬みでした。

その後、色々調べてきましたが、今頃になってようやく、自分の研究について、その輪郭と方向性が見えてきたように感じています。学生時代は情熱に溢れていたものの、手探りで先が見えませんでした。そんな辿々しい足取りは相変わらずですが、最近、これまでの研究を問い直し、次の射程が見えてきた感触がありますね。

——熟成してきた、ということでしょうか？

そう言い切れるほどの自信はありませんが、わかりやすい表現ですね。でも「熟成」って、さじ加減を間違えれば腐らせるし、時期を逸すれば不味くもなる。まさに諸刃の剣ですよ。私が曲がりなりにも研究者としてやってこられたのは、テーマに飽きなかったというのが大きいんです。あと、失敗や回り道をしたのも、研究を続けていく要だったと思います。博士を出ても「スタートライン」という感じでしたし、就職してからは忙しさを言い訳にして研究を停滞させ、焦りが募ることも多くなりました。でも、そんな不完全燃焼な思いがあるからこそ、次につながっているのかなど。いつも焦ってばかりなんですけど、少しでも調査をやり始めると、楽しさが焦りを上回りますね。妬みに関心を抱いて20年ほどになりますが、興味はまだまだ尽きません。

——20年も続けられる、研究の面白さはどんなところでしょうか。

好きなデザイン、飽きないデザインってありますよね。お気に入りのデザイン。私にとって、妬みという感情がまさにそれなんです。私は妬みに、人間らしさの証と言いますか、「美しさ」みたいなものを感じたんだと思います。人を羨んだり妬んだりする姿はたとえ醜くとも、そこに人間の本质を垣間見たんですよ、きっと。プラスにもマイナスにも働く可能性を秘めた感情。やっぱり美しいです。

——ネガティブな感情を研究していて、大変なこともあるのでは？

もちろん難しさはあります。わかりやすい教示や、回答に窮しない項目作りなど、ネガティブな事象のデータを取るには相応の配慮が必要です。ですが、いくら工夫したところで完全無欠の方法には

なりえませんから、質問紙調査の限界を感じることもままあります。

でも、基本的には楽しくやっていますよ。昔から専門領域に強いこだわりはなくて、妬みの研究ができれば何でもよかったんですが、最近は、様々な領域の人たちに支えられていると痛感しています。統計のトレンドも、恥を忍んで詳しい人に聞いたりして。院生のときは自分だけでカバーできる部分が多かったのですが、今はそんな勢いもなければ、若くもない。だからこそ、なんでも自分ひとりでやろうとしないで、お互いにとってメリットのある形で協力していければと考えるようになりました。

——これからの研究課題について教えてください。

現在は「いじめ」の研究に力を入れています。特に、どちらかといえば加害者側ではあっても、その自覚なく関わっている人たちの感情に関心があります。感情にも色んな面がありますよね。笑うこと自体はポジティブですが、人の失敗を笑っていたらネガティブな側面もあるわけですし。いじめを取り巻く感情を首尾よく測定できるような方法を開発して、それを行動的な指標とも絡めて利用していきたいですね。

——では最後に、若手の研究者に向けたメッセージをお願いします。

失敗しておくのも、悪いことばかりじゃない気がします。種々の失敗を通じて、自分に何が足りないか思い知り、それをアクティブな記憶として思い出せるかどうか。そういう経験が、次につながる原動力になるかもしれないからです。

ただ、易々と「失敗を活かせ」と言いたいわけじゃありません。失敗に気付いたときって、本当につらくて、事と次第によっては堪

え難い苦しみを味わうことだってありますよね。だからといって、そんな痛みとは無縁で、なんでもポジティブに考えられるような人になれば良いとも思えないんです。「つらい」という気持ちを誤魔化さないで、しっかりと心に留めておく。こうした痛みを自分で認めてやるのが、長年に亘って研究と向き合っていく上で重要なんだと信じています。

■インタビュー者の自己紹介

インタビューの感想

「妬み」というテーマを20年近く研究し続け、今も一心に取り組まれているというお話を伺い、私もその粘り強さを見習ってまいろうと決意しました。また、先生の「失敗をすることが原動力になる」というお話に非常に感銘を受けました。私は失敗の多い人生を歩んでおりますが、今後もそれらの経験をアクティブな記憶として持ち続けて、研究の燃料にしていきたいと思えます。

字数の関係で掲載できなかったのですが、授業のデザインの仕方、教育活動と研究活動の両立についてもお話を伺うことができ、大変勉強になりました。

現在の研究関心

人間の視覚、特に文字の認識に興味を持っています。現在は低次の処理（コントラストコーディングや空間周波数解析）が高度な認知的処理である文字認識にどのように寄与しているかを研究しています。また、所属している研究室

では目の見えにくいロービジョンについて考える機会も多いので、文字の認識に関する基礎研究から、読書困難を抱えるロービジョンの人たちの支援にもつながっていきたいです。現時点ではまだまだ応用にまで行き着いていませんが、粘り強く続けます。

心理学を専攻した理由

心理学に興味をもったのは学部2年次のゼミでした。色や芸術と人間の視覚について書かれた教科書を読んだことがきっかけで、ぼんやりとですが、視覚が面白いと思うようになりました。ちょうど同時期、ユニバーサルデザインについての授業を複数受講して、成果を社会に還元できるような研究がしたいと考えていました。視覚が面白くて、でも社会の役に立つ卒業研究が良い……などと生意気なことを思いながら過ごしていたら、所属学科にぴったりのゼミを見つけて、現在に至ります。

理想の研究者像

楽しく研究を続ける研究者が理想です。自分も今、ありがたいことに楽しくやらせていただいておりますが、興味のアナテナを張りながら、自分の研究にまっすぐ向き合い続ける先輩方を見ると、自分もこんなふうに進んでいきたいと強く思います。

また、研究だけでなく、教育に力を入れて若手をバリバリ育成している先生方に憧れています。まだまだ自分のことで手一杯ですが、少しずつ先生方の教育術を学んでいきたいと思っています。



Profile—おおにし まどか

2011年に東京女子大学現代文化学部コミュニケーション学科卒業後、みずほ情報総研株式会社勤務を経て、2013年に東京女子大学大学院人間科学研究科生涯人間科学専攻（認知社会適応領域）入学。現在は博士後期課程。専門は心理学・視覚科学。